実践者のまなざしを育む保育実習の授業
―子ども理解と子育て支援に着目して―

浅見佳子*　尾崎　司**

Learning practical perspectives in child care and education practice class
- Focus on child understanding and child care support-

Yoshiko ASAMI,　Tsukasa OZAKI

(要旨)

保育実習の授業では、子どもの理解を深めるまなざしや、現場実践者としてのまなざしを育むことを大切にしている。本稿では、そのような視点から授業実践を取り上げ、考察した。実践事例１では、子どもの姿を繰り返し捉え直し他者との対話を通して、子どもを多面的に理解し、子どもから保育を構想することを試みた。実践事例２では、クラス便りや連絡帳、掲示物などから発信者の意図を読み取る活動を通して、現場から子育て支援を発想する構えを身に着けることを試みた。こうした思考過程の体験によって、学生が「保育は子どもからはじまる」ということを実感でき、実習生が現場や実践から保育を発想しようとする学びができた。

キーワード：子ども理解、まなざし、保育の計画、子育て支援、アクティブ・ラーニング

はじめに

保育は子どもからはじまる。これは、自明のことである。しかし、いざ実践を行おうとすると、この「子どもから保育をはじめる」ということが、容易ではないことに気付かされる。そのため、子どもの姿から保育を考えることを一旦脇に置いた保育が行われることは少なくないように思われる。同様に実習指導においても、子どもの姿よりも保育の技術や知識を優先し、保育の方法に重きをおいた実習指導が行われているということはないだろうか。

当然のことであるが、子どもを理解することは簡単なことではない。ましてや、学生となればなおさらである。しかし、子どもの思いや、興味・関心、一人ひとりの中にある育ちなどに、目を向けようとするまなざしを学生の中に育み、わからないけれど子どもって面白い、難しいけれど子どもを知りたい、理解したいという意欲や心構えを養成課程から丁寧に育んでいくことが重要である。

また、保育実習指導Ⅲ（保育所）[1]、保育実習Ⅲ（保育所）[2]を終えた半年後には、多くの学生が保育の現場での一歩を踏み出す。そのため、保育全体の理解をしていかなければならず、子育て支援なども常に現場をイメージした理解が必要となる。加えて、保育は一人ではなく他者とともにチームで営まれるものである。

＊　　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

保育者の協働という点においても体験的に理解できるよう、様々なメンバーでグループワークを行い、主体的、対話的に課題に取り組める機会を担保していくことは学生の学びにとって重要である。

本稿では、そのような視点から２つの実践事例を取り上げ、保育実習指導の授業について考察する。

１．授業のねらい

保育実習指導Ⅲ（保育所）は、最高学年である４年次に設定され、学びの集大成となる最終実習にむけての指導となる。保育実習Ⅰ、教育実習を経て、これまでの学びを踏まえながら、子どもの姿から一人ひとりの育ちの理解を深めるまなざしを持ち、保育そのものを理解することが求められる。また、その子どもたちの姿から保育を構想していく力を身につけ、指導計画を作成し、計画―実践―省察―評価という保育の過程を理解しながら保育実践をイメージしていく。更に、多様な保育の展開、保護者支援、子育て支援など、保育所及び保育士の役割全般に対する理解が深まることを授業のねらいとし、実践力を身に着けることができるよう指導を行っている。

２．授業実践事例１
「子どもからはじまる保育の観点を育む授業実践」

２－１．授業概要

最初に子どもの最善の利益についての講義を行い、各自で改めて子どもにとっての最善とはなにかを考え、子どもにとっての最善の保育とつなげて各々レポートを作成した。

その後、子ども理解について考えるための DVD を視聴し、事例と考察を書き出した。その事例と考察をもとにグループワークを行い、他者との対話を通して新たな視点で子どもの姿を捉え理解し、子どもからはじめる保育の構想を試みた。

【授業の流れ】

①子どもが遊んでいる姿の DVD を観る（1 回目）
②心に残った場面を思い返し、次回までに事例と考察を書いてくる（課題）
③学生同士で事例と考察の相互添削を行う
④もう一度、DVD を観る（2 回目）。その際、子どもの育ちの視点、保育者の直接的・間接的援助の視点、遊びの視点など、子どもの姿、場面を読み取る視点についての解説を聞く
⑤事例と考察を改めて修正する
⑥少し期間をあけて、改めて DVD を見直し（3 回目）、もう一度それぞれに子どもの姿を捉え直す
⑦それぞれの子どもの姿に対する捉えを持ち寄り、１グループ（3 人）で話し合い、実態を捉えた上で、ねらいを立て内容を考える
⑧環境重視型の指導案をグループで１枚作成する
⑨環境重視型の指導案を基にした時系列の部分実習指導案を各自詳細に作成する
⑩持ち寄った部分実習指導案をグループで見せ合い、修正箇所を話し合う
⑪子どもの１日の生活の流れを再確認しながら部分実習指導案をもとに改めて個々の日案を作成する

保育を行う上では通常、子どもの実態を理解した上で計画を立てるのだが、授業で学生が全日実習・責任実習を行うための計画を立てようとする時には、学生の前に子どもはいない。また、DVD 等を用いて子どもの姿をとらえる機会を与えても、子どもの思いや行為の意味に目を向けることは難しく、姿を断片的に捉えて計画をし、自分がやりたいことや、自分が得意とすることを優先する傾向があることが経験上、しばしば見受けられる。

そこで授業では、子どもの実態理解を深めるために同じ DVD を繰り返し観ながら、個々の視点、他者の視点、グループで考えた視点について話し合い、様々な考えに触れて子どもの姿を捉えていくことを試みた。

DVD の場面について簡単に説明する。5 歳児の男児 5，6 人が変容可能なマットで遊んでおり、そのうち、マットを立てて跳び越えることを始める。最初はあちらこちらから好き勝手に跳び越えようとするのだが、安全面等に意識が向き始めると、並んで順番に一方向から跳ぶようになる。また、高さを調整し、飛び越えられない時には助走をつけるなどの工夫をし始め、倒してしまった時には元の状態に戻すというルールも作っていく。どうすれば、皆が安全に楽しく遊べるか互いの思いを伝え合いながら遊びを展開していくというような場面である。

２－２．学生が捉える子どもの姿

それぞれの学生が捉えた子どもの姿を一部紹介する。（これ以降に示すものは学生の許諾を得て掲載し、誤字等については筆者が若干修正を加えている）

＊　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

子どもの姿の理解２回目（個人の子ども理解）

①怪我が起きそうな遊び方をしている。

②子どもたちだけで１つの遊びに工夫を加えて発展させている。

③場所を決め一方向から跳ぶルールをみんなで守ることで、安全に体全体を使って思いきり山を飛び越えることができているようである。

④子どもは１つのモノで様々な遊びを工夫したり発見したりしている。

⑤　A 君はマットの山を飛び越えたいという思いがあるようである。B 君はマットの山を飛び越えるよりもマットの山に突っ込み倒れこむことを楽しんでいるようである。C 君はおもちゃのトンカチをマットや床に叩きつけた後の跳ね返りを楽しんでいるようである。

子どもの姿の理解４回目（グループでの子ども理解）

①自分の気持ちを伝え、相手の気持ちを考え、子ども同士でルール決めて安全に配慮しながら遊びを楽しむ姿がある。

・マット遊びを通して身体を動かすことを楽しみながら、自分で跳び方を工夫し挑戦する姿がある。

・マットの山が崩れた時には上手く戻せない子を手伝うなど友だち同士、楽しく関りあって遊ぶ姿がある。

②思い思いのマット遊びを楽しむ姿が見られたが、徐々にマットで山を作って飛び越える遊びへと発展し、その中で一方向に並び順番に跳ぶという姿や倒した人がなおすという姿が見られている。

・遊びを通して山を越えたいというチャレンジ精神やもう少し高く飛びたいという向上心が見られ、運動面ではジャンプや片足跳びなど 5 歳児ならではの姿が見られている。

③自分の気持ちを伝えながら、ルールを守って友達と遊ぶ姿が見られる。

・マットを用いて走る、跳び超えるなどの遊びを友達と共に楽しむ姿がある。

・安全に配慮しマットの高さを変える等、遊びを工夫しながら何度も挑戦する姿が見られる。

２回目の子どもの姿の理解では、子どもの行為を一つ一つ断片的に捉えている。しかし、4 回目になると、子どもの行為の意味やつながりを理解しようとする子どもの姿の捉えが見られるようになる。

例えば、「マット遊びを通して身体を動かすことを楽しみながら、自分で跳び方を工夫し挑戦する姿がある」では、マット遊びを楽しんでいるという理解だけではなく、自分で跳び方を工夫し挑戦すること自体も楽しんでいる子どもとしての姿を捉えていることが窺える。また、「マットの山が崩れた時には上手く戻せない子を手伝うなど友だち同士、楽しく関りあって遊ぶ姿がある」では、一緒に挑戦し跳び越えることだけではない、一緒に失敗することも、一緒に直すことも含めて関わり合うこととして捉え、子ども同士の中に育まれている関係性を理解していることが窺える。

また、「遊びを通して山を越えたいというチャレンジ精神やもう少し高く飛びたいという向上心が見られ、運動面ではジャンプや片足跳びなど 5 歳児ならではの姿が見られている」では、マット超えに挑戦する子どもの姿の内面にある思いを理解しようとしておりチャレンジ精神、向上心が芽生えていることを捉えている。そして、心身の育ちとして、5 歳児の発達の姿と照らして子どもを理解しようとしていることも窺える。

このように、学生が子どもの姿をより深くとらえ、子どもを理解しようとするまなざしがそこにはある。このようなまなざしを持って子どもを捉えるためには、自分のまなざしに加え、他者のまなざしに触れ、多面的に子どもを捉えることが重要である。そして、このような子ども理解の深まりが保育を計画していく際の支えとなるのである。

子どもの今の姿を深く理解しようとすることは、目の前の子どもの願いは何なのかということにも目を向け、その子どもの願いを考慮して保育者としての願いを考えようとする姿勢や構えが形成されるのではないだろうか。

２－３．他者とともに子ども理解を深め、子どもからはじまる保育を構想する

ここで子どもの姿のとらえ 4 回目の中で示した③グループの環境を中心とした指導案（表１）と時系列の指導案（表２）を紹介する。彼らの指導案は、修正が必要であり、ねらいの書き方にも再考を要する部分があった。しかし、その保育案については、目の前の子どもの姿から始まっており、子どもの願いが埋め込まれた環境づくりの工夫がなされているので紹介したい。以下に示すのは修正されたねらいである。

［ねらい］

・遊びの中で十分に体を動かす心地よさを感じ、友達と力を合わせて挑戦し達成感を味わう。

この指導案では、マット遊びをしている子どもの姿から、「走る・跳ぶことに加え多様な動きを含む遊びの経験を楽しめるように」という保育者の願いを込めつ

＊　　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

つ、少し難しいことに挑戦してみたいという子どもの願いを大切にし、チャレンジ精神をかきたてる内容を考えている。更に、子どもの挑戦を修行とつなげてイメージし、忍者修行を通した遊びを提案している。そこには、子どもたちがわくわくドキドキしながら修行に向かうためのアイデアがたくさん詰まっている。

「こうしたら、子どもたちが喜ぶのではないか」、「このような工夫で、子どもたちが楽しめるのではないか」という提案がいくつもあり、そこには、子どもの思いに目を向け、子どもがやりたいと思うであろうことを、学生たち自身が子どもになったつもりで考えているように思われる。

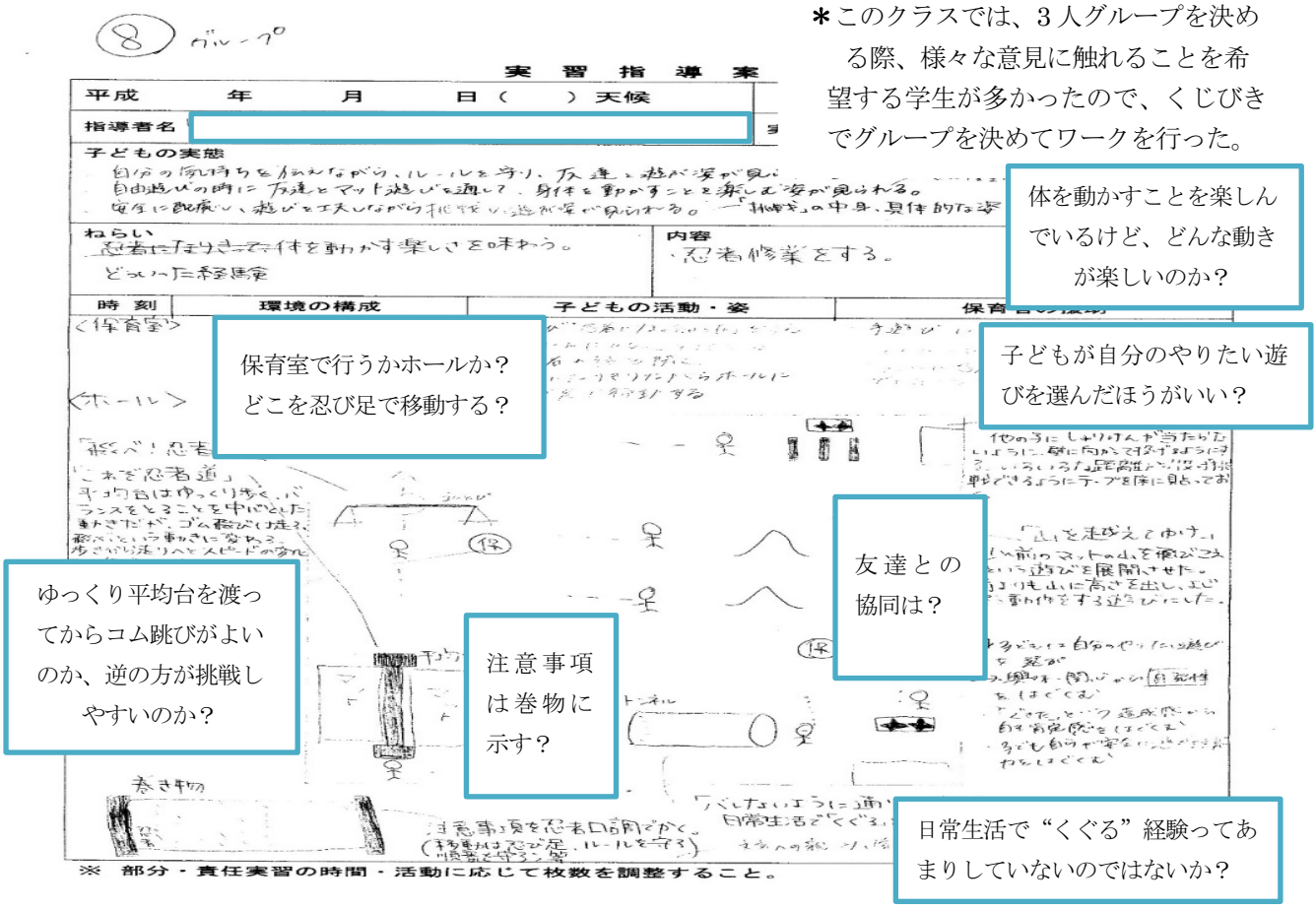
このように子どもの視点に立ってみることを通して、子どもの思いを知り気持ちを体感することは、子どもを外側から観察するようなまなざしでみて理解しようとする子ども理解ではなく、子どもの身になって、子どもの内側から子どもを理解しようとするまなざしであるということができる。

この姿勢こそ、冒頭に述べた「わからないけれど子どもって面白い、難しいけれど子どもを知りたい、理解したいという意欲や心構え」を持つということに繋がると考えている。

この授業では子どもの実態を捉えることを繰り返し行った。1回目は自分のまなざしで子どもの姿を捉え、2 回目は、友達と教員によるまなざしを加えて新たに子どもの姿を捉え直す。そして、少し期間をあけて 3 回目にもう一度、自身のまなざしで子どもの姿を捉え直し、4 回目はグループで子どもの姿をとらえる。

このように何度も子どもをみるという行為を繰り返し、理解したいと思ってみていくと、目の前の子どもからしか保育は考えられないことがよくわかる。つまり、「保育は子どもからはじまる」ということを学生は実感するのである。その思考過程を考えることなく、保育を考えようとしても、それは保育者からはじまる保育でしかない。この子どもの姿から子どもの願いに目を向け、子どもの姿から今の姿の半歩先を見据えた経験を考え、提案していく。授業で学生がこのような思考過程を体験し、子どもの姿から考えるように至る授業が重要なのである。

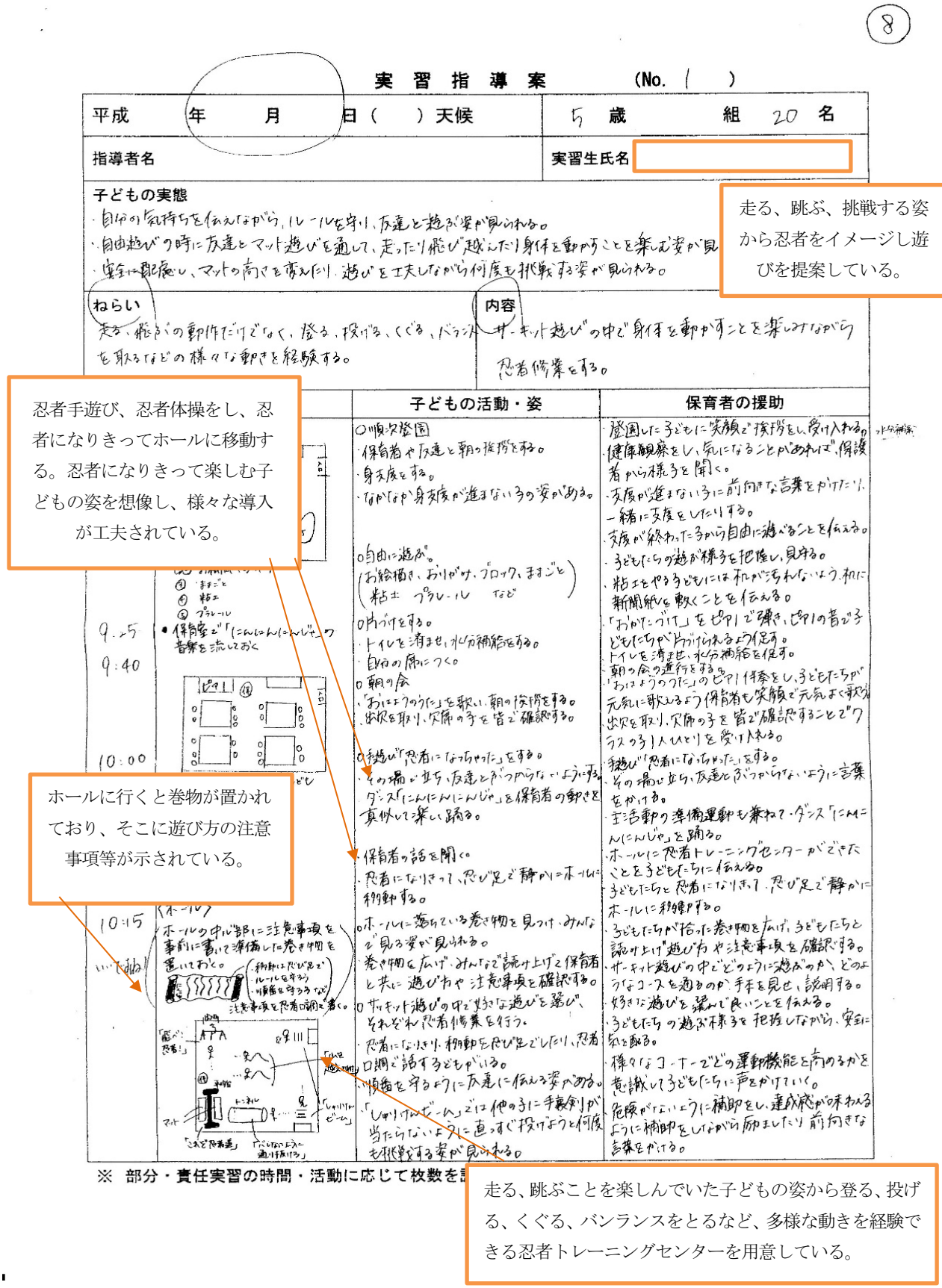
表 1. 環境を中心に考えた指導案



＊このクラスでは、3 人グループを決める際、様々な意見に触れることを希望する学生が多かったので、くじびきでグループを決めてワークを行った。

＊ あさみ よしこ 相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊ おざき つかさ 相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

表 2. 時系列の指導案



8

実 習 指 導 案 (No. 1)

平成 年 月 日 ( ) 天候	5 歳 組 20 名
指導者名	実習生氏名

子どもの実態
・自分の気持ちを伝えながら、ルールを守り、友達と遊ぶ姿が見られる。
・自由遊びの時に友達とマット遊びを通して、走ったり飛び越えたり身体を動かすことを楽しむ姿が見
・安全に配慮し、マットの高さを変えたり、遊びを工夫しながら何度も挑戦する姿が見られる。

ねらい
走る、飛ぶの動作だけでなく、登る、投げる、くぐる、バランスを取るなどの様々な動きを経験する。

内容
サーキット遊びの中で身体を動かすことを楽しみながら忍者修業をする。

	子どもの活動・姿	保育者の援助
9:25 9:40 10:00 10:15	○順次登園 ・保育者や友達と朝の挨拶をする。 ・身支度をする。 ・なかなか身支度が進まない子の姿がある。 ○自由に遊ぶ。 (お絵描き、おりがみ、ブロック、ままごと 粘土 プラレール など) ○片づけをする。 ・トイレを済ませ、水分補給をする。 ・自分の席につく。 ○朝の会 ・「おはようのうた」を歌い、朝の挨拶をする。 ・出欠を取り、欠席の子を皆で確認する。 ○手遊び「忍者になっちゃった」をする。 ・その場で立ち、友達とぶつからないようにする。 ・ダンス「にんにんにんじゃ」を保育者の動きを真似して楽しい踊る。 ・保育者の話を聞く。 ・忍者になりきって、忍び足で静かにホールに移動する。 ○ホールに落ちている巻き物を見つけ、みんなで見る姿が見られる。 ・巻き物を広げ、みんなで読み上げて保育者と共に遊び方や注意事項を確認する。 ○サーキット遊びの中で好きな遊びを選び、それぞれ忍者修業を行う。 ・忍者になりきり、移動を忍び足でしたり、忍者口調で話するどもがいる。 ・順番を守るように友達に伝える姿がある。 ・「しゅりけんビーム」では他の子に手裏剣が当たらないように直っすぐ投げようと何度も挑戦する姿が見られる。	・登園した子どもに笑顔で挨拶をし、受け入れる。 ・健康観察をし、気になることがあれば、保護者から様子を聞く。 ・支度が進まない子に前向きな言葉をかけたり、一緒に支度をしたりする。 ・支度が終わった子から自由に遊べることを伝える。 ・子どもたちの遊ぶ様子を把握し、見守る。 ・粘土をやる子どもには机が汚れないよう、机に新聞紙を敷くことを伝える。 ・「おかたづけ」をピアノで弾き、ピアノの音で子どもたちが片づけられるよう促す。 ・トイレを済ませ、水分補給を促す。 ・朝の会の進行をする。 ・「おはようのうた」のピアノ伴奏をし、子どもたちが元気に歌えるよう保育者も笑顔で元気よく歌う。 ・出欠を取り、欠席の子を皆で確認することでクラスの子1人ひとりを受け入れる。 ・手遊び「忍者になっちゃった」をする。 ・その場で立ち、友達とぶつからないように言葉をかける。 ・主活動の準備運動も兼ねて、ダンス「にんにんにんじゃ」を踊る。 ・ホールに忍者トレーニングセンターができたことを子どもたちに伝える。 ・子どもたちと忍者になりきって、忍び足で静かにホールに移動する。 ・子どもたちが拾った巻き物を広げ、子どもたちと読み上げ遊び方や注意事項を確認する。 ・サーキット遊びの中でどのように遊ぶのか、どのようなコースを通るのか、手本を見せ、説明する。 ・好きな遊びを選んで良いことを伝える。 ・子どもたちの遊ぶ様子を把握しながら、安全に気を配る。 ・様々なコーナーでどの運動機能を高めるかを意識して子どもたちに声をかけていく。 ・危険がないように補助をし、達成感が味わえるように補助をしながら励ましたり前向きな言葉をかける。

※ 部分・責任実習の時間・活動に応じて枚数を

走る、跳ぶ、挑戦する姿から忍者をイメージし遊びを提案している。

忍者手遊び、忍者体操をし、忍者になりきってホールに移動する。忍者になりきって楽しむ子どもの姿を想像し、様々な導入が工夫されている。

ホールに行くと巻物が置かれており、そこに遊び方の注意事項等が示されている。

走る、跳ぶことを楽しんでいた子どもの姿から登る、投げる、くぐる、バンランスをとるなど、多様な動きを経験できる忍者トレーニングセンターを用意している。

＊ あさみ よしこ 相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊ ＊ おざき つかさ 相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

他のメンバーは、子どもの要望を聞きながら遊具の設定を変える。子どもの導線を考えて設定すると書き、子どもが主体的に取り組める援助を考えている。

実施日　月　日　氏名（

実習指導案　(No. 2

時刻	環境の構成	子どもの活動・姿	保育者の援助
		「山を越えてゆけ」では、マットでできた山を越えようとよじ登る友達に「頑張れ」などと援する姿がある。 均台でバランスが取れず、うまく平均台の上歩けない子がいる。 「飛び！忍者」では高く遠く飛ぼうと助走の仕方や飛び方を工夫する姿がある。 どもたち同士でルールを決めて競い合い、それぞれが楽しむ姿がある。 づける。 がなか気持ちが切り替えられず、遊べる子どもがいる。	平均台でうまくバランスが取れない子には、手を貸したり安全に配慮した援助を行う。 「飛び！忍者」のゴの飛びのコーナーでは、子どもがゴムに引っかかり転倒しないよう、そばで安全に配慮しながら見守る。 片づけるよう言葉をかける。 なかなか気持ちが切り替えられない子には「また今度やろね」など次の活動に期待が
11:50	〈保育室〉	給食の準備をする。 ○給食を食べる。 ・友達と会話を楽しみながら、食べる姿がある。 ・食べ終えた子から順次「ごちそうさま」をし、食器を片づける。 ・食べ終えた子は歯を磨き、パジャマに着替える。 ・静かに遊ぶ（絵本、お絵描き、おりがみなど）	給食の配膳を行う。 ・子どもたちと一緒に楽しく給食を食べる。 ・子どもたちの給食を食べる様子を見守り、援助が必要な子には声をかける。 着替えの援助が必要な子に援助する。 ・子どもたちの遊び様子を把握し、見守る。
12:45		○手遊び「はじまるよ はじまるよ」をする。	・手遊び「はじまるよ はじまるよ」をする。
13:00	〈ホール〉午睡の様子		
14:30		○布団を片づけ、着替える。 ・トイレ、手洗いを済ませる。	・トイレ、手洗いを済ませ、自分の席につく言葉をかける。
15:00	〈保育室〉	○おやつを食べる。 ・友達と会話を楽しみながらおやつを食べる。	おやつの配膳をする。 ・子どもたちと一緒におやつを食べる。
自己の反省・評価		食べ終えた子から順次「ごちそうさま」をし、食器を片づける。 ○自由に遊ぶ。（室内） （カプラ、ブロック、つみき、プラレール、忍者ごっこ、ままごと、おりがみ、あやとりなど） ○順次降園	子どもたちの食べる様子を見守る。 おやつの片づけをする。 子どもたちの遊び様子を把握し、見守る ・親元に来た保護者に今日の子どもの様子等を伝える。
15:30			
16:00			

①　手裏剣ビーム
動物の口に手裏剣３つを投げ入れる。投げる運動
②　山を越えて行け
子どもの実態から考えた遊び。跳び箱にマットをのせ、高さを調整しながら山をよじ登り飛び降りる運動
③　これぞ忍者道　とべ忍者
バランスを取りながら平均台を渡り、スピード感をもって走りゴムを跳び超える運動
④　バレないように通り抜けろ
くぐるという動作をメインに考えた運動

この指導案を書いた学生は片づけを考えていたが、他のメンバーは、片付けをせずにそのままにし、「次のトレーニングをどんな内容にするか楽しみにする」という子どもの姿を予想し、保育者の援助の欄には、「子どもたちが一所懸命に取り組んだことを認め、次のトレーニングに期待をできるように言葉かけをする」としている。

この指導案を書いた学生は絵本の読み聞かせを考えていたが、他のメンバーが「忍者トレーニングセンターの感想を言ってみんなで楽しかったことを共有する」と伝えると、そのように計画を修正していた。子どもの１日の生活の流れを改めて意識し、遊びの継続性や発展性にも目を向けた内容になっていった。

＊　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

３．授業実践事例２
「子育て支援の観点を育むアクティビティ事例」

３−１．授業概要

保育士の役割として「保護者支援・子育て支援」は、ますます重要視されている。しかし、保育者養成にとって重要な保育所実習の授業（事前学習・事後学習）において、どのように「保護者支援・子育て支援」の指導をおこなうかは、担当教員として悩むところである。また、保育現場からは、実習中に「保護者支援・子育て支援」の場面に必ず出会えるわけではないという声も聞かれ、実習で体験することが難しい項目である。

実習中に実習生が「保護者支援・子育て支援」の取り組みに気づき、保育者に話を聞いたり、質問するなどの探索的態度を養うためには、何が必要であろうか。この授業では、表４のような授業シナリオを作成し、「保護者支援・子育て支援」の観点を育むアクティビティを試行した。

授業では、まず、子育て応援施設としての保育所の役割について講義し、基本的な知識の確認をした。保育所内での活動から子どもを理解するだけでなく、親子関係の視点から子どもを捉えることが重要であり、社会全体で子育て支援をおこなう必要性について話をした。また、地域での子育ての協働・協働ネットワークづくりや、子ども・子育て新制度についてふれた。

その後、アクティビティ「アイテムから子育て支援を考える」をグループでおこない、アクティビティ・シート（表５）を用いて検討し、気づいたこと発表し、共有した。

発表の共有をベースにして、各々のアイテムについて保育現場の事例をあげ、再び講義をおこなった。事例により具体的なイメージができたところで、新・保育所保育指針における「子育て支援（第４章）」の解説をし、日常的な家庭連携と保育所の特性を生かした子育て支援について確認した（図１参照）。

３−２．アクティビティからの学び

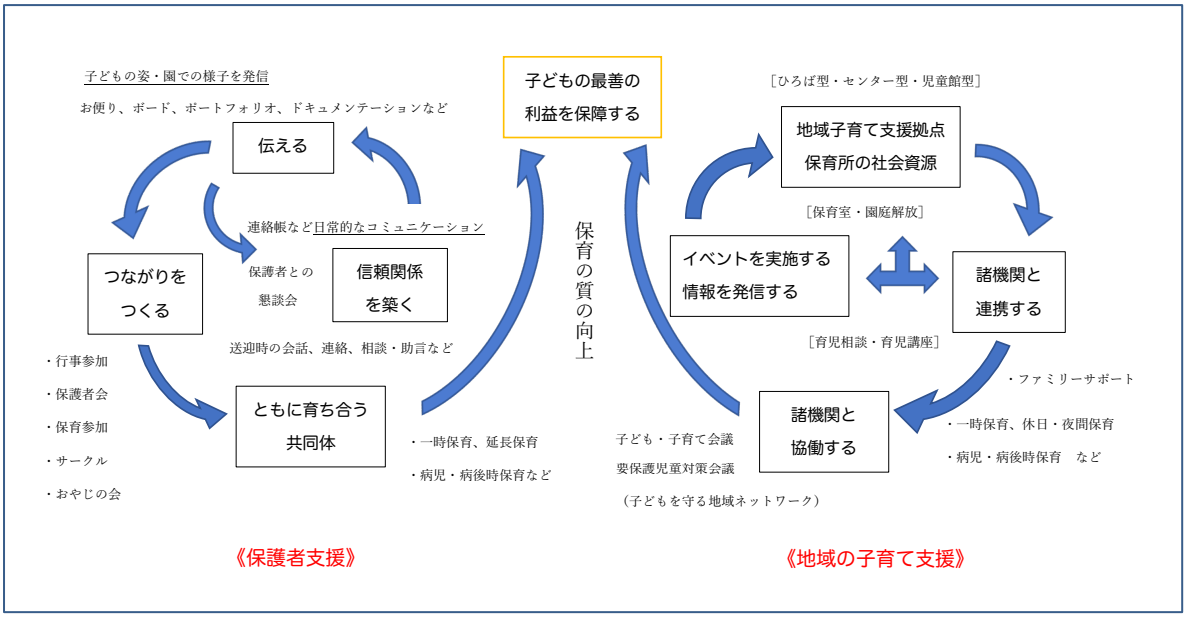
アクティビティ（表３）を通しての学びを、振り返りシートから数例、紹介したい（下線は筆者）。

《振り返り①》クラス便りや園便りを作成する意図やねらいを考えたことにより、保護者に伝わるようにするための工夫が見えてきて、すごく勉強になった。また、地域の子育て家庭に対する支援について、実習園では具体的にどのようなことをしているのか知りたくなった。さらに、実習に行った際には、子育て支援で大切にしていることについて聞いてみようと思った。クラス便りや園便りなども、子育て支援につながるということを知り、子育て支援の具体的な方法について学びたいと思った。

《振り返り②》スマホのアプリ対応には驚いた。子育て支援は、その時代や地域の環境、またその時のニーズに合わせた形式に変化させていくことが大切なのだろうと感じた。保育所の子育て支援は、保育所を利用している保護者にとどまらず、地域の保護者に対する子育て支援も行っていく必要があることをあらためて感じた。地域の保護者に対する子育て支援は、一つの園だけで行うのではなく、地域の園同士が協力していくことが大切だろうと感じた。

《振り返り③》子育て支援は、どちらかというと親（保護者）

図１．保護者支援と地域子育て支援



＊　　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

に向けた支援だと思っていたが、今日の授業を受けて、「親子支援」であることを強く感じた。また、相談支援を主に行なっていると思っていたが、全く違い他にも多くのことを行なっていた。実習では、相談支援以外にどのようなことを行なっているのか、園だよりなども見せてもらい、理解を深めていきたいと思う。実習では、「情報発信」、「場づくり」、「連携・協働」、この３つを深く知りたいと思った。

《振り返り④》保育所は保育を必要とする福祉施設から子育てを応援する施設へ転換されていることについて、普段はあまり意識していなかった分、はっとさせられました。子育て支援といっても、保護者との対話、相談を受けるだけが全てではなく、保護者に配布するお知らせ（園・クラスだより、給食・保健だより）も支援の一環ということに大変興味を持ちました。また、あのような紙媒体のお知らせには、幼稚園や保育園以外の所も関わっていて、社会全体で子育てに取り組む様子が分かってきたので、自分の住む自治体では何をしているのか気になりました。実習では、何気なく見ていた掲示物に注目し、実際に保育者に意図やねらいを尋ねてみたいと思います。保護者同士のつながりのために、どんな行事が組まれているのか行事予定もチェックしたいです。

この学びを通して、主体的に学ぶ意欲が引き出され、子育て支援＝相談という認識が変わり、実習の観点や保育者への質問が具体的になっていることが分かる。

3−3．自ら探求する構えを身につける学習

では、この授業実践の意味を振り返ってみたい。

まず、振り返りシートの記述では、子育て支援＝相談支援という認識を持つ学生が多かったが、この活動によって様々なレベルの子育て支援がおこなわれているという認識を新たに持つことができている。

そして、「発信者の意図」を読み取る活動は、実習で出会うアイテム（例えば、クラス便りや連絡帳、掲示物など）には必ず発信者がいて、そこには「保護者支援・子育て支援」のねらいがあることを探索する体験となっており、学生はこのグループワークによって学びの構えを獲得している。また、こうしたことが理解できると、学生は保育者の役割や意図に関心を持つことができ、さらにアイテムのやりとりに着目することによって、そこで交わされる保育者と保護者との会話や関わりがどういう意味を持つのかという観点に気づくことができるのである。

［時間］３５分　［グループ構成］５～６名 ［用意するもの］リソース・シート（表５参照）、 実物もしくはコピー資料の入った大きな封筒
［すすめかた］ １．各グループに用意した封筒とシートを配布し、どのアイテムから検討してもよいことを伝え、グループでシート項目について検討する。 ２．検討した内容を各自、シートに書き込み、グループでの気づきをまとめる。 ３．グループでの気づきを発表し、クラス全体で共有する。
［アクティビティ前後のミニレクチャー］ 【アクティビティ前】子育て応援施設としての保育所の役割について講義し、「具体的にはどのような取り組みがなされているか？」など発問する。 【アクティビティ後】アイテムの解説をおこない、保育所保育指針にある子育て支援と関連づけて講義する。
［リフレクション］ 今日の授業で関心を持ったことは何か？　実習では、子育て支援についてどんなことを聞いてみたいか？

このように、この授業実践は学生の認識を広げ、学びの構えを獲得する活動になっている。この構えは実習現場に行っても、クラス便りや連絡帳のやりとりに関心を持ったり、保育所内に掲示されたドキュメンテーションやポートフォリオ、その他の資料が子どもの保育以外に保護者への情報提供になっていることを認識したり、自治体が情報発信している子育て支援の情報から地域子育て支援の取り組みを保育に位置付けることができるなどの実習行為に反映され、保育者の役割や意図について質問するなど学生が「現場」から主体的に考える態度につながっていくだろう。

このことは、「事前学習でなかなか子育て支援について取り上げられない」という前述の問題に対して、アクティブ・ラーニングがきわめて有効であることを示唆している。子育て支援に関する実体験がない学生にとって、講義で伝えられるだけでなく、自ら主体的に探索する学びが実習指導で重要となってくる。この授業実践報告では、「現場」のリソースと学生を結びつけ、「現場」から発想できる構えを作る事例を紹介した。今後は、この後の実習体験や事後学習とリンクさせ、実習指導における「保護者支援・子育て支援」の授業を考えていきたい。

表３．アクティビティ「アイテムから子育て支援を考える」

＊　　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

表４．授業シナリオ

保育実習指導

【第１回】 子育て応援施設としての保育所の役割

ねらい	1．保育所が「保育を必要とする児童福祉施設」であることに加え、子育て支援の概念から保育所の役割を捉え直す． 2．入手可能な資料から、子育て支援の取り組みに触れ、どのような意図でおこなわれているかを読み取り、考察する． 3．気づきをまとめる中で、実習中に子育て支援の取り組みに関心を持ち、関わる構えを作る．		
予習	なし		
Time	内容	Tips	留意事項
0	６つのグループを構成する．		教室全体を使うように配置図で指示する．
5			
10	講義：子育て応援施設としての保育所の役割	パワーポイント資料	
15			
20	グループに資料を配布し、課題を出す．	資料セット（６セット）	
25		シート「アイテムから考える」	
30			話し合いの様子を見ながら、必要ならば対話する．
35			
40			状況を見つつ、あと１～２分でまとめるように促す．
45	グループ発表	資料配布：プレゼン資料と拡大図	項目を３つ程度にするように促す．
50			記入状況に応じて、重複を避け項目全てにふれる．
55	講義：事例、保育所保育指針の解説	パワーポイント資料	発表内容を取り上げ照合しながら、話す．
60			
65			
70			
75			
80	振り返りシートを書く	振り返りシート配布	
85		資料配布	よく読んでおくよう指示する．
90	振り返りシートの提出		
復習	振り返りシートを提出できなかった人は、次回に持参		

表５．シート

『アイテムから子育て支援を考える』

［課題］時間内にできるだけ多くのアイテムについて、下表にあるような検討をグループでおこないます。その後、グループで発表します。

No.	アイテム	発信者は誰か？	保護者にとって、どのような支援になっているか？	どのような意図・ねらいがあるか？
1	クラス便り（３部）			
2	園便り			
3	園のホームページ			
4	ほけんだより			
5	給食だより			
6	れんらくアプリ（アンケート）			
7	子ども家庭支援センター（HP）			
8	児童館だより（児童・乳児向け）			
9	地域育て合い事業（HP）			
10	子育て支援予定表（３部）			
11	子育てメッセ（イベント案内）			
12	子どもセンター（事業計画）			
13	ブックレット（ガイドライン）			
14	食育冊子（毎月の掲示物）			

［メモ］実習で、さらに深めたい、詳しく聞きたいことは、何か？

＊　　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師

４．考察

これまで見てきたように、実践事例１では、子どもの姿を何度も捉え直し、他者との対話を通して子どもを多面的に理解することを試みた。そして、指導案修正は３回を重ねた。このような体験をした学生は、学んでいたはずの、子どもを理解すること、子どもから保育を構想することがこんなにも難しく大変なことだったのかと改めて気づかされたと話していた。

また、自分の考えと他者の考えを擦り合わせることの大変さを味わうとともに、自分では思いつかない考えに触れることができたことで、保育に対する考えが広がったと話す学生もいた。

実践事例２では、子育て支援の実習課題を、「現場」のリソースと学生を結びつけ、「現場」から子育て支援を発想する構えを身に着けることを試みた。同じく学生たちは、学んでいたはずの自分の理解が不十分であることに気づかされ、子育て支援＝相談支援だけではない新たな認識を得たと話している。また、この学びを通して、子育て支援の観点や保育者への質問が具体的になっていることは、実践者としてのまなざしをもって現場での実習を行うことができ、主体的に学んでいくことに繋がるであろう。

最終学年になると、学生は今までの学びが自信となり、最終実習には少し余裕をもって向かうことができるように思われる。その心の余裕は更なる学びに向かうために必要なことである。しかし、改めて最終学年だからこその学びの再構築が必要である。現場からもう一度、保育をみるまなざしを持ち、現場に触れながら実践を捉える。４年間で自分の中に育まれつつある、保育観や子ども観を改めて問い直すことで、実践者となる構えを身につけていくことに繋がるのではないだろうか。

そして、学生自身が分からない、難しいと言いながら、悩み考えつつ取り組んで行くことが何よりも重要なことである。自分自身で考えてみる、自分自身で問うてみる、自分自身で気づく、そのような学びに向かうための課題の工夫、取り組むための十分な時間の確保などは、教員側が授業を丁寧に行い、アクティブ・ラーニングをさらに深い学びへと提示していく必要があるだろう。

１人で考え抜く、悩むことと並行して他者との対話を通して学びを深めていくことも重要であることは言うまでもない。保育は一人ではなく他者との協働、チームの上に成り立っているものである。こうした授業を通してそのことを感じ取っていくことがそのまま実践力につながり、実践者としての一歩を踏み出す準備となると考えている。

５．まとめ

実習指導が実習に行くための指導で終わっていては意味がない。もちろん、実習に向かうための準備は重要である。しかし、その先にある本当の実践、現場を常にイメージして学生が学んでいくことで実践力が養われ、問うべき問いというものにも向かっていくことができるのではないだろうか。

今ある子どもの姿から保育を構想していくことも、現場にあるリソースを用いて子育て支援について理解することも、どちらも学生にとっては難しい課題である。しかし、実践の場からしか現場を理解することはできない。ゆえに、実習生という立場であっても常に実践者としてのまなざしをもって実習をとらえ、現場にあるものに触れ、現場で起きていること、行われていることから現場を理解していく。そのような観点を育む授業を今後も工夫していく必要がある。

おわりに

保育者は、目の前の子どもの姿に合わせて、その都度柔軟にかかわりを修正し、応答していくことが重要であると言われる。養成課程においても目の前の学生の姿から授業内容を常に修正しつつ、学生主体の対話的で深い学びにつながる授業実践について考え続けていきたいと思う。

［注］

１．厚生労働省が示している保育実習指導Ⅱが本大学における保育実習指導Ⅲ（保育所）となる。

２．厚生労働省が示している保育実習Ⅱが本大学における保育実習Ⅲ（保育所）となる。

＊　　あさみ　よしこ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科
＊＊　おざき　つかさ　相模女子大学学芸学部子ども教育学科非常勤講師